

M・L・キングとR・B・グレッグ——非暴力思想の一系譜

菊地 順

はじめに

マーティン・ルーサー・キング・ジュニアの取り組んだ公民権運動は、非暴力大衆直接行動を特色とする運動として記憶され、特にその非暴力の取り組みと思想に対して、さまざまな批判はあるとしても、多くの称賛と評価が与えられてきた。キングが一九六三年に受賞したノーベル平和賞は、その最たるものであろう。また、その研究もかなりの量になってきている。

その中心は、やはりキングとマハトマ・ガンジーとの関係であろう。この点については、キング自身繰り返し語っているだけではなく、多くの研究書がある。⁽¹⁾ またラインホルド・ニーバーの影響も見逃せない。この点についても、キング自身言及していることでもあり、⁽²⁾ 両者の関係もキング研究の重要なテーマとなつてゐる。また非暴力の活動家でありまた組織家でもあるベイヤード・ラステインの与えた影響も大きいと言わなければならない。幸い、近年ラステイン自身についての研究も盛んに行われており、重要な評伝が複数出版されてゐる。⁽³⁾

しかし、日本での研究は必ずしも十分であるとはいえない。筆者自身もこのテーマについて取り組んできたが、⁽⁴⁾ 非暴

力の思想的背景やその後の拡大・発展等を鑑みるとき、まだまだ手つかずの領域があると言わざるを得ない。この小論は、そのような欠けを少しでも補うべく試みられたものである。すなわち、日本ではあまり馴染みがないが、アメリカに初めてガンジーの非暴力思想の全容を書物を通して紹介し、キングの非暴力の理解と実践に大きな影響を与えたりチャード・B・グレッグという平和主義者で非暴力の思想家・実践家がいる。この小論では、このグレッグとキングとの関係を紹介し、非暴力思想の系譜の一端を明らかにしたいと思う。

1. アフリカ系アメリカ人とガンジーとの出会い

初めに、アメリカのアフリカ系アメリカ人（以下「黒人」と表記）とガンジーの非暴力思想との出会いを見ておきたい。

ところで、そもそも非暴力思想の出発点をどこに見るかは、未だ十分議論されているとはいえないであろう。非暴力の〈精神〉ということであれば、それこそ、ガンジーが非暴力思想を抱く直接のきっかけとなったイエスの教え、「もし、だれかがあなたの右の頬を打つなら、ほかの頬をも向けてやりなさい」（口語訳聖書、マタイによる福音書第五章三九節）に遡るとも言える。⁽⁵⁾ また、そこまで遡らないとしても、たとえばアメリカの非暴力の研究家アイラ・チャーナスは、その著『アメリカの非暴力——その理念史』⁽⁶⁾において、アメリカにおける非暴力の歴史の始まりを「アナバプテスト派」に見ている。そして、その後の展開を、「クエーカー教徒」、さらに黒人奴隷の即時・全面・無条件の解放を主張した「ウィリアム・ロイド・ガリソンと奴隷制廃止主義者たち」に見、その後第一次世界大戦の「決定的転換点」に至ったと見ている。そして、その中で、ようやくガンジーに言及している。確かに、そこで論じられているガンジーに

至るまでの歩みは、暴力を否定し、平和的解決と改善に取り組む歴史が見られるため、そこに非暴力の歴史を見ることが十分に可能であろう。また、本論で取り上げるリチャード・グレッグも、ガンジーの非暴力を紹介したその著『非暴力の力』⁽⁷⁾において、ガンジーに先立つ非暴力の取り組みとして、一九世紀半ばにハンガリーで起こった、ハンガリーをオーストリアに併合しようとする皇帝フランツ・ヨーゼフに対する闘いに言及することから始めている。そして、さらに広く歴史を見回し、キリスト以前にも遡って、以下のように指摘している。すなわち、「非暴力的抵抗の原理はすでに多くの異なった国々において多数の先見者たちや勇気ある人々によって考えられ、別々に適用されてきた。それらの中には、老子、孔子、仏陀、ジャイナ教のティールタンカラ (Tirthankara)、イエス・キリスト、アッシジの聖フランシスコ、ジョージ・フォックス、レオ・トルストイ、またその他の言及すべき多数の人たちがいる」⁽⁸⁾。したがって、「非暴力的抵抗の原理」という視点から見れば、歴史的には、世界中に、ガンジーに先立つ非暴力の歴史があつたと言えるであろう。

しかしながら、上述の歴史は、少し突き放して言えば、後代の非暴力思想から捉え直された歴史であつて、それはあくまでも〈精神的〉にそう言えるとの見方もできるように思う。というのも、われわれが問題としている非暴力とは、ガンジーやキングの運動に見られる大衆を主体とする「直接的行動」をその特色とするものであるからである。この点に関しては、チャーナスも認めており、一九三〇年代の後半に、「シット・イン (sit-ins) とかレイ・イン (lie-ins) のような、直接的行動の新しい非暴力の技術」が用いられることによって、それまで行きづまりを覚えていた非暴力的取り組みが打破され、新しい状況が生まれたことを指摘している。そして、チャーナス自身、それを「決定的転換点」と見たのである。そして、「直接的行動への運動は、マハトマ・ガンジーと彼がインドで導いた運動に対する高まる意識によつて促進された」と述べている。加えて、「一九三〇年代、非暴力に最も重要な影響を与えた者の中に、ガンジーの運動を学ぶためにインドに行つたりチャード・グレッグがいる」と指摘し、「グレッグの過程としての平和の考え

『グレッグがその著『非暴力の力』の中で紹介している「手段は常に目的を決定する」というガンジーの考え』は、非暴力のサークルで最もよく知られるようになった」と語っている⁽⁹⁾。したがって、ガンジーの非暴力思想が知られるようになって、アメリカにおける非暴力の取り組みは新たな段階を迎えたと言える。またグレッグも、これと同様の指摘をしている。すなわち、先に引用した言葉に続いて、「しかし、ガンジーは現代における顕著な人物である」と言及し、以下のようにカンジーを紹介している。すなわち、カンジーは、「理論を構築し、それを組織化された団体の様式の中で大衆運動に応用した。そして、その拡大の妥当性を多数の異なる状況下での成功裏に終わった実際のキャンペーンによって証明した」⁽¹⁰⁾。すなわち、ガンジーは、非暴力の理論を構築し、それを大衆の直接行動の運動として展開させたのであり、そこに、それまでには見られない顕著な非暴力の取り組みが見られるのである。

さらに、以上の点に加え、何よりも「非暴力」(nonviolence)という概念が生じ、それが定着したのはガンジーからなのである。すなわち、ロベール・ドリエージュは、その著『ガンジーの実像』において、神格化されたガンジーではなく、その実像に迫ろうとしているが(そのため、ガンジーの偏った性格とかスキャンダラスな言動にも触れている)、その中で、非暴力の概念に触れ、「ヨーロッパの言語でこの用語を普及させたのは彼「ガンジー」である」⁽¹¹⁾と指摘している。すなわち、ドリエージュによれば、言語的には、もともと非暴力という言葉は、サンスクリット語の「アヒムサ」(日本語ではしばしば「不殺生」と訳されている)に遡る。そして、「アヒムサは、語幹であるヒムサ(有害性、そこから暴力)に、否定のアが付いたもの」なのである。したがって、ガンジーが用いた「非暴力」という用語にはこのサンスクリット語が反映されていると言える。また歴史的に見れば、この考えを最も徹底的に主張したのはジャイナ教で(そこから菜食主義の考えも生まれている)、これがヒンドゥー教の伝統の中にも流れ込み、「この伝統に基づいて、ガンジーは、非暴力を自分の思想の根本的な概念とした」のである⁽¹²⁾。ただし、自伝でも詳しく論じているように、ガンジーが非暴力の思想を抱く直接のきっかけとなったのは、先ほど触れたイエスの言葉にあった⁽¹³⁾。したがって、直接的な

衆運動としての非暴力を主眼に置く限り（その〈精神的〉見方は別として）、やはりガンジーにわれわれが問題としている非暴力思想の出発点を見るのは妥当であるように思う。

それでは、アメリカで、このガンジーの非暴力思想はいつ頃から知られるようになったのであろうか。この点について、ラステインの研究者ジョン・デミリオは、W・E・B・デュボイスにその初めを見ている。すなわち、それまでに、ガンジーの南アフリカでの活躍や一九一五年にインドに帰国した後の活躍について、アメリカでも白人の平和主義者や黒人の間で徐々に注目されるようになったようであるが、黒人社会でそれを文章化して伝えたのはデュボイスが初めてであった。デミリオによると、デュボイスは一九一九年、NAACP (National Association for the Advancement of Colored People 全米有色人種地位向上協会) の機関誌『危機』(Crisis) に一文を寄せ、「われわれはみな一つである——われわれは軽蔑された者と抑圧された者であり、イギリスとアメリカの〈二ガー〉である」と語り、その読者の注意をインドへと喚起した。そして、「一九三〇年代までには、インドの独立運動が拡大するにつれ、ガンジーの方法が、黒人新聞の論評の通常的话题となった」と指摘している。⁽¹⁴⁾これは、先に見たチャーナスの見解とも一致している。したがって、少なくとも一九三〇年代までには、ガンジーの非暴力について、黒人社会でも広く知られるようになったと言える。そして、この時期にグレッグの著書『非暴力の力』⁽¹⁵⁾（一九三五年）が出版され、すでに見たように、それがアメリカ社会で徐々に広まっていったガンジーへの関心をさらに深める働きをなし、また非暴力の思想を広く知らしめることになったのである。⁽¹⁶⁾

2. リチャード・B・グレッグの生涯

そこで改めて、グレッグの生涯を簡単に見ておこう。ただし、残念ながら、グレッグに関する資料は極めて少ない。本論での論述は、主に以下の二つの資料に基づく。一つは『マーティン・ルーサー・キング・ジュニア百科事典』⁽¹⁷⁾の項目「Gregg, Richard B.」とグレッグを紹介しているインターネットのホームページである。⁽¹⁸⁾ 後者は、マサチューセッツ大学の政治学教授ジョン・ウーディング (John Wooding) が開設しているもので、グレッグの簡単な伝記、年表、写真、関連図書・論文等が紹介されている。またこれら以外に、『キング資料集』⁽¹⁹⁾にキングとグレッグの往復書簡が収められているが、生涯に関しては、何よりもウーディングに頼らざるを得なかった。

リチャード・B・グレッグ (Richard Bartlett Gregg, 1885-1974) はクエーカー教徒の弁護士で、⁽²⁰⁾ また非暴力主義に立つ平和主義者であり、その活動家また著述家でもある (因みに白人である)。また、すでに言及している一九三五年に出版された『非暴力の力』によってよく知られており、これはキングにも大きな影響を与えた。それは、キングが、一九五七年にNAACPの役員から、彼に最も影響を与えた書物の名を挙げるよう求められたとき、ガンジー、ヘンリー・デイヴィット・ソロー、ウォルター・ラウシェンブッシュの書物と共に、このグレッグの書物を挙げたほどである。⁽²¹⁾

グレッグは、一八八五年、コロラド州のコロラド・スプリングスで、牧師であつた父ジェイムズと母メアリーの子として生まれた。長じてハーバード大学で学び、一九〇七年にBAを、また一九一一年に法学の学位を得た。この年、イングランド、スコットランド、フランス、ドイツを旅行している。ウーディングによれば、卒業後はボストンの法律

事務所で働き（一九一三年まで）、一九一五年には共同でシカゴに法律事務所を開設した。さらに一九一八年には、全国戦争労働者会議（National War Labor Board: NWLB）から職を得た。ところで、グレッグがガンジーの非暴力思想に関心を抱ききっかけとなったのは、一九二二年に関わることになった鉄道労働者のストライキにあったようである。四〇万人以上の労働者が参加したこのストライキは過酷を極め、暴徒化したのが、最終的には雇用主側の勝利に終わった。グレッグはこのストライキの期間（一九二二―一九二四年）にガンジーを発見し、その書物を読み、終にインドに行く決意をするに至ったと言う。

ただし、そうした決意に至った背景には、それに遡る一〇年間の弁護士としての仕事があったようである。ウーディングによれば、グレッグは、一〇年間、産業界、政府および労働者の間の連絡役（鉄道労働者の仲裁人²²）として活動し、ストライキを解決し、ストライキを指揮し、またストライキに反対した。そうした働きを通して、グレッグは、アメリカの労働者、産業界、政府の結び付きについての全体的な見通しを得たが、それはまた彼を極端な結論へと導くことにもなった。グレッグは、一九二四年一〇月四日付の手紙で、以下のように語っている。「私は私たちの政府や現存する諸政府に反対です。政府は暴力に基づき、また暴力によって存在します。……私は機械産業や商業主義に反対します。……私は資本主義に反対します。……労働組合はほとんど何も成し遂げていません。というのも、労働組合は現存する秩序内でのみ働いていて、それを変えようと試みもせず、利益のより公平な分配を得ようとしているだけだからです」。そして、こう結論づけている。「こうした確信が現代アメリカに合致しないことはお分かりでしょう。こうした確信はどの場所でも合致しませんが、それらの多くは、他のどの国々においてよりもインドにおいて合致すると思います」。グレッグは、この手紙を書き、それを母親や兄弟たちや彼らの配偶者たちに回覧した。そして一九二五年一月一日、インドに向けて出帆したのである（ただし、一九一三年に一度インドを尋ねており、この時が最初であつたわけではない）。

グレッグがアメリカに戻ったのは、一九二九年のことであつた。グレッグは四年間インドに滞在し、その間ガンジーのアシラムで七か月間過ごした。⁽²⁾ ウーディングによれば、そこでガンジーの親しき友となり、一九三〇年代に西洋世界にガンジーの思想をもたらすことになった非常に小さなグループの中心的メンバーとなつた。帰国後は、マサチューセッツ州のチェストナットヒルに彼の姉妹と共に生活したが、一九三〇年、チャールストン出身のインナー・デザイナーのノニー・デーヴィス・タッパーと結婚、同年、妻と共に再度インドを訪れガンジーと会っている。一九三五年に同じマサチューセッツ州のナティクに移つたが、この年、ガンジーの許で学んだ非暴力についてまとめた彼の名著『非暴力の力』を出版した。

ところで、その後の歩みであるが、翌年の一九三六年、グレッグはペンシルベニア州にあるペンデルヒル・クエーカー修養・研究センター (Pendle Hill Quaker retreat and study center) に移り、事実上の責任者として活動した。また一九三七年から一九三八年にかけてイギリスを訪れ、平和誓約同盟 (Peace Pledge Union) を尋ねている。一九三八年、ペンデルヒルからマサチューセッツ州のナティクに戻り、一九四一年まで、その野菜園で働きながら著述や講演活動をした。

一九四一年から一九四二年には、友人の求めでペンシルベニア州のキンバートン農園で六週間働き、また一九四二年から一九四三年にかけては、ヴァーモント州の友人の農園で一年間働いた。また一九四二年から一九四六年の間、ニューヨークのビッグフラッツで、意識的従順のキャンプである非暴力学校に参加した。また一九四四年に、妻の病気のため、ヴァーモント州のプットニーで数学の教師を始め、一九四六年に、精神病の施設に入れられた妻の看病に専念するため、そこを引退した。しかし、二四時間体制の妻の看病を止めなければならないことを悟り、一九四七年から一九四八年にかけて、ヴァージニア州ジャマイカの砂糖農園に移り、ウィンホールに住むことになった。

その後の歩みを簡単に時系列的に紹介すると、一九四八年一月三〇日、ガンジーが暗殺される。同年冬、インドで行

われた世界平和会議に出席する。その後、一九五四年五月二〇日に妻が亡くなり、一九五六年、砂糖農園を辞す。また同年、キンバートン農園時代に出会い、長年の友人であったエヴリン・スピーデンと再婚。さらに同年九月、インド人社会の労働者にガンジーの経済学を教えるため南インドに赴く。その後、一九五八年に帰国、ニューヨークのチェスターに住む。

ところで、以上のような歩みを経たのち、グレッグは、一九五九年二月に初めてキングに会うことになった（このとき、グレッグは七四歳、キングは三〇歳であった）。それは、戦争抵抗者同盟の年次夕食会でのことであった。それは、キングがインドを訪問する前日のことで、このときグレッグは、キングがインドで会うべき人たちのリストを渡した。その後グレッグは、七月二二日から二四日にアトランタのスペルマン大学で行われた「人種隔離制度に対する非暴力的抵抗についての第一回全南部研修会」に参加し、その議論を導いた。それは、インドから帰ったキングが提案したものであったが、キングはこのとき、南部キリスト教指導者会議（Southern Christian on Leadership Conference: SCLC）は「南部の多くの人たちに「非暴力の」思想を伝えることに失敗している、というのも、それについて真剣に学ぶ時間を取ってこなかったからだ」と感じていた。

その後もグレッグは非暴力の活動に参加するも、次第に健康の衰えを覚え、一九六四年にオレゴン州のマクミンヴァルに移り、一九六八年には同じオレゴン州にある引退者施設に移った。そして、その間も執筆活動を続けたが、一九七四年一月二七日、八九歳でこの世を去った。

おおよそ、以上のような生涯を送ったグレッグであるが、このウーディングの資料に一つ欠けている点がある。それは、FOR (Fellowship of Reconciliation) との関係である。『キング百科事典』によれば、『グレッグは、その後「著書『非暴力の力』の出版後」の人生の大半を通してFORに関わり、CORE (Congress of Radical Equality) の創設者の多くに影響を与えた⁽²⁴⁾」とある。また『キング資料集』第三巻の編集者注にも、「グレッグは、FORの影響力のある

メンバーであつた」⁽²⁵⁾との指摘がある。このFORとは、もともと第一次世界大戦が勃発したとき、イギリスとドイツの平和主義のキリスト者たちが立ち上げた組織で、アメリカには翌年支部が組織され、良心的兵役拒否などの活動を行った。そして、戦後は、労働者の権利を守り、人種差別を終わらせる取り組みへと発展した。⁽²⁶⁾キングは、以下でも触れるように、モンゴメリーでのバス・ボイコット闘争時に、FORから派遣されたベイヤード・ラストイン (Bayard Rustin) とグレン・スマイリー (Glenn Smiley) の具体的支援を受ける中でその関わりを深めることになったが、グレッグもこのFORに関わつたと言うのである。ただし、それ以上の詳しい資料は今のところ見つからず、その関わりはどの程度のものかは分からない。おそらくFORといろいろな接触があり、また多方面に影響を与えたであろうことは十分推測できるが、それ以上は不明である。

3. キングとグレッグ(1)——出会いと交流

さて、キングとグレッグの出会いであるが、二人が直接会つたのは、すでに触れたように、一九五九年二月のことであつた。しかし、キングがグレッグの存在を知ることになったのは、それから遡ること三年、一九五六年二月末のことであつた。このときキングは、前年の一二月から始まつたモンゴメリーでのバス・ボイコット闘争の指導者として、次第に頭角を現しつつあつた時期である。しかし、その運動の原理にしようとしていた非暴力に関しては、まだまだ未熟であつた。そこで、FORから派遣されたのが、すでに触れたように、ラストインと同僚のスマイリーであつた。⁽²⁷⁾そして、そのとき、スマイリーがキングに手渡した数冊の本の中の一冊がグレッグの著書『非暴力の力』であつたのである。このとき、キングは直ちにその本を読み、大きな感銘を受けることになった。しばらくしてグレッグに書いた手紙

の中で、キングは、「非暴力の考えに、これほどより現実主義的で深遠な解釈を与えたものを、私は知りません。それは、私の生涯にわたり永続的な影響を与えることは間違いないと書いています」⁽²⁸⁾と書いている。

この書物との出会いから二人の交流が始まったのであるが、一九五九年に直接会うまでは、手紙の遣り取りが主であった。最初に手紙を書いたのはグレッグであった。それは、スマイリーから自分の本がキングの手に渡り、それをキングが感銘深く読んだことを知らされたからである。それは、以下のような手紙であった。興味深い内容が含まれているので、そのまま全文を記載する。

〈グレッグからキング宛てた手紙1〉（一九五六年四月二日付）⁽²⁹⁾

（前文省略）

あなたは私を個人的に知らないでしょうが、自己紹介しますと、私は、グレン・スマイリーの話によるとあなたが持ちだという本、『非暴力の力』の著者です。インドに滞在した四年間の内七か月、私はガンジーと彼のアシラムで過ごしました。また私は、ガンジーがあなたが非暴力を選択したことを知ったならば非常に喜ぶだろうとお伝えしたいと思います。ご存じのように、アフリカの黄金海岸の黒人たちは、最近この方法で自由を獲得しました。それは多くの年月がかかり、苦難も経験しましたが、犠牲は暴力を用いた場合よりははるかに少なく、成功の機会は非常に増します。また当事者間の後に生じる良好な関係は、大きな将来の祝福です。人種の統合は偏見やプライドや他の過ちで否定されるかもしれないとはいえ、それは人がまさにその命を賭けることができる精神的、社会的、道徳的、生物学的な現実です。永続的に非暴力の愛の圧力がかけられるならば、それは勝利を得る真実となるでしょう。あなたの努力に神の祝福がありますように。

ところで、取り組みの一つとして、ガンジーの手紡ぎの様式に倣った何か建設的な仕事 (constructive work) をあなたがたのコミュニティでも取り入れることをお勧めします。思いつきですが、清掃や塗装や整理整頓のキャンペーン、公衆衛生や良き物理的秩序の創造といったものがあるかもしれません。活動的な指導者、良き組織家、そのようなものの価値を見分けることのできる人を選んでください。インドで、イギリスの支配に対する最も強力で、最も純粋な、最も持続的非暴力の抵抗をもたらしたのは、多くの仕事を継続的に進めた地域でした。

あなたとあなたの努力に神の祝福がありますように。コリント人への第一の手紙一三章を忘れないでください。

(結び省略)

以上の手紙には、非暴力の取り組みの利点が端的に語られていると言える。それは、暴力を用いた解決よりも効果的であり、何よりも、その後の人間関係の絆を温存し、新しい関係の構築がたやすい点が挙げられている。加えて、グレッグは、キングに具体的な提案をしている。それは「建設的な仕事 (constructive work)」の導入である。それは、ガンジーが糸車を用いた手紡ぎを運動の象徴的働きとして導入し、運動の核を作ったように、キングたちの黒人運動にもそうした象徴的な建設的な仕事を導入することを勧めたものである。いずれにしても、この手紙には、キングたちの非暴力の取り組みに対する全面的な賛同と支援の気持ちがあふれていると言える。

このグレッグからの最初の手紙に対し、キングは五月一日付で返信を書いている。それは短いものであるが、キングの真摯な思いが表された手紙である。キングは、まず丁寧に礼を述べ、先に引用した感想を語り、そして最後にこう記している。「近いうちにお会いできることを望んでいます。グレン・スマイリーは、あなたのことをしょっちゅう話し

ています。彼はここでの私たちの状況全般においてとても助けになっています⁽³⁰⁾。近いうちに会うことは叶わなかったものの、この後二人の交流はさらに深まっていた。

手紙に関して言えば、その後、一九五六年五月二〇日付で、グレッグはキングに手紙を書いている。この手紙も、最初の手紙と同様に、非暴力についてのより深い理解を助ける文面になっている。加えて、キングたちの闘いの困難さを理解し、それに助言をし、励ましの言葉を綴っている。これも、少し長いが、そのまま全文を紹介した方がグレッグの熱意も伝わると思うので、以下に掲載する。

〈グレッグからキングへの手紙2〉（一九五六年五月二〇日付⁽³¹⁾）

五月一日付のあなたの美しい手紙が、ジャマイカから夏の休暇を過ごしている私のところに転送されてきました。『非暴力の力』があなたのお役にたっていることを知って、嬉しく思います。

よろしければ、もし改訂版を出すことができるならばそれに付け加えたいと思っているいくつかのアイデアを、お伝えしたく思います。

仏陀はかつて、非常に深淵で真実で、さらに非常に適切にまた簡潔にあることについて語りました。彼は、怒りは風に向かって唾を吐くようなものだと言いました。すなわち、——怒りは、怒りを感じ、それを表現する人に、常に帰ってきます。このことは、恨み、疑い、不信、誇り、不安といった不和を生じさせるすべての感情にとつても真実であると思います。モンゴメリーでのあなたの現状においては、それは白人の多くにとつて真実であり、またおそらく、その訓練が間違っている黒人たちにとつても真実でありましょう。精神的領域は統一の領域であり、その統一に障害をもたらす者は誰でも、他者に苦しみをもたらそうともたらずまいと、不可避的に自ら苦しみます。あなたの協会の構成員たちが「仏陀の」その真理を深くまた

着実に理解することができれば、それは彼らにとつてもまた状況全体にとつても非常に役立つであろうと思います。

あなたの非暴力的活動の妥当性についての多くの私的なまた公的な議論の経緯において、だれかがそれは非民主主義的であると主張するならば、あなたは民主主義は統治される者の同意の原理に基づくと答えることができます。同意は投票によつてのみ示され得るという如何なる教義もありません。投票は、同意あるいは同意の拒否が示され得る唯一の方法です。「しかし」不正義あるいは虚偽への同意の拒否は、非暴力的抵抗によつて示され得ます。またその種の拒否は、投票が不可能なところ、あるいは非常に遅いところでは、多くの状況において有効です。

あなたの同胞が、あらゆる種類の挑発や遅延——どれほど長くても——にもかかわらず、真実にその原理と非暴力的抵抗の実践に固執するよう祈るとはいえ、にもかかわらず、訓練の失敗があるとしても、また一部の黒人たちが極度の挑発の下で、また地方の白人の心を変えるのに要する長い時間の中で絶望し、暴力に走るとしても、絶望してはなりません。起こり得るいかなる刑罰をも受け入れ、その後に隊列を改革し、ガンジーが行ったように同胞の中で構造的行動を發展させ——村の公衆衛生や手紡ぎがインドの諸制限の下で行ったような、彼らの自尊心と自信を回復させる行動——、再度非暴力の原理を説教し、そしてそのような新たな訓練を何年か経たのち、それを再度試みてください。あなたは、ガンジーがこのことを行ったことを思い出すでしょう。チャウリ・チャウラーで暴力が勃発した一九二一年「一九二三年の誤り」の戦いで、ガンジーは運動を中止し、一九三〇年までもう一つの大きな試みをすることはありませんでした。しかし、当座の間、彼は限られた地域でいくつかの地方的サティアグラハを遂行しました。そして、一九三一年に他のすべての会議派の指導者たちと共に牢獄に入れられたとき、彼は、第二次世界大戦が起こり、イギリスが

インドの協力を得るために会議派の指導者たちを解放し、もう一つの非暴力運動——それは終に自由をもたらしました——が始められた時まで、中断を余儀なくされました。「しかし」いかなる失敗もガンジーの氣をくじくことはできなかったのです。失敗にあなたの氣をくじかせてはなりません。必要とあれば、何年にもわたって続けなさい。あなたの来るべき成功は、アメリカの政治的、社会的、経済的生活のすべてを淨化するでしょう。あなたは、あなたのエネルギーと献身と忍耐のすべてを要求するに足る大きな何かを行っています。全世界があなたに感謝するでしょう。神があなたを強めてくださるようにな。

この状況は、(山上の説教の) 至福の二つの意味を明らかにし、また説明すると思います。「柔和な人たちは、さいわいである、彼らは地を受けつぐであろう」。また「わたしのために人々があなたがたをののしり、また迫害し、あなたがたに対して偽って様々な悪口を言う時には、あなたがたは、さいわいである」。「わたしのために」は「精神的諸原理のために」を意味していると思います。非暴力と正義は、精神的原理です。もしあなたが、迫害され、正義のために非暴力的抵抗を貫くならば、世界中の人類の良心は影響を受け、淨化され、またあなたはすべての人種の兄弟たちを助けるゆえに祝福されるでしょう(新約聖書の「さいわいな」(至福の)(blessed)と訳されている「ギリシャ語は「幸運な」(happy)とも訳され得るでしょう)。白人の根深い強力な誇りは、白人の最大の道徳的弱点です。白人は、あまりにも弱すぎて、それを自ら取り除くことができません。おそらく、白人はあまりにも弱く、自らそれを取り除くためには黒人の助けを得なければならぬということに気づくまでは、白人は、それを取り除くことはできないでしょう。精神的領域は、優越感も劣等感もなく、ただ神の御前での平等だけがあるところです。ガンジーが、私たちすべてがその領域を得ることができるよう助けてくれることを願います。

小さな穏やかな刺激のたくさんの繰り返し、あなた方の敵対者の中に、神の圧倒する精神を呼び起こ

し、それが彼らを担い、彼らのまぎに存在を変えるまで、それを成長させることを忘れないように。

以上の手紙は一九五六年五月二〇日付で書かれたものである。それは、モンゴメリーでの闘いの正に真つ只中の時期であった。ここにはグレッグの力強い励ましの言葉が見られるが、その中でも特に注目すべきものは、最後に記されている、キングたち黒人の闘いが、白人たちの救いともなるという指摘である。白人のグレッグが、白人の誇り（白人至上主義）こそ白人の最大の道徳的弱点であり、それは黒人たちの助けなくして取り除くことはできないと指摘したのである。この指摘は、キングたちに、自分たちの闘いの意味を一層広げ、また深める声となったのではなかろうか。キングは、その闘いにおいて、しばしば自分たちの闘いは同時にアメリカ全体の自由のための闘いであると繰り返し語ったが、それを明言したのは、一九五七年に南部キリスト教指導者会議（SCLC）を立ち上げた時である。キングは、この点について次のように振り返っている。「一九五七年に南部キリスト教指導者会議を設立した時、私たちは『アメリカの魂の救済のために』という言葉をもットーに掲げた。私たちはこのビジョンを黒人だけのいくつかの権利に限定して考えることはできないと確信していた。その上で、奴隷の子孫が未だに繋がれている足かせから完全に解き放たれなければ、アメリカは本当に自由となり再生することは不可能だということを確認し合った⁽²²⁾。こうしたキング（たち）の確信の背景には、グレッグの指摘が少なからず影響を与えていたように思われる。白人たちの道徳的弱点（白人至上主義）を克服するためには黒人の助けが不可欠であるとの白人の側からの積極的発言が、キングにとって、少なくともその確信を深める声となったことは間違いないように思われる。おそらく白人の側からは激しい反発を招くであろうこの主張を、キングはその生涯を通じて繰り返し語ることになったが、それを支えた一つに、このグレッグの声があったと推測することは十分許されるのではなかろうか。ただ、残念ながら、この手紙に対するキングの返信は見当たらない。

さらに、少し時間は経つが、一九五八年一〇月にもグレッグからキングに宛てて手紙が書かれている。これは一〇月二七日付で出されたもので、キングが同年モンゴメリーでのバス・ボイコット闘争の記録として出版した『自由への大いなる歩み』⁽³³⁾のインドでの出版の手助けを申し出たものであった。それに加え、グレッグは以下のようなアドヴァイスをしている。すなわち、ガンジーのように、キングも大衆運動に必要な団結を養う自助と教育のプログラムを創出することに力を注ぐべきことを語り、加えて以下のように助言している。「ガンジーは、非暴力の闘争が、社会的であれ、経済的であれ、政治的であれ、人々の道徳的な蓄積と忍耐に大きな緊張を課すため、異なつた領域や局面での創造的な道徳的くつろぎと休息の期間が必要であることを理解していた」⁽³⁴⁾。

これに対し、キングは同年の二月一八日付で返信を書いている。キングは、まず返信が遅くなったことを詫びた上で、グレッグが自分の書物に関心を持ち、インドでの出版を考えてくれていることに感謝を述べ、またすでにそのような計画が進行していることを伝えている。すなわち、ガンジーの著名な弟子のカカ・カレルカール (Kaka Kalekar) がキングの許を訪れた際、ガンジー記念トラストからの出版の提案を受け、代理人との交渉に入つたが、多忙のため結論に至っていないことを伝える一方、「将来の可能性についてあなたと話し合うことができれば嬉しい」と述べている。また、手紙に記されていたグレッグの提案と、グレッグから送られた著書『インドの発展の哲学』⁽³⁵⁾についての礼が述べられている。そして最後に、「p.s.」として、二月に妻と共に約六週間インドを訪れることを伝えた上で、「私たちの訪問に關してのあなたの示唆と会う必要のある人たちの名前」⁽³⁶⁾を貰えれば感謝であると記している。この要望に対し、グレッグは同年二月三一日と翌年（一九五九年）一月二三日の手紙で、インドで会うべき人の名前と住所を知らせた。このように、キングとグレッグは、直接会うまでの間にも、手紙を通して交流を深めていった。それは、どちらかと言うと、グレッグのほうがより積極的であつたとも言えるかもしれない。おそらく、その背景には、キングの多忙さがあつたことは間違いないであろう。ただ、キングにとつて、こうしたグレッグの関心と助言は大きな励ましとなつてい

の、キングの高い評価と感謝の思いが表されている。そして、その中に、キングが受けた影響の核心が示されているとも言える。そこで、まず、その全文を紹介したいと思う。

『非暴力の力』第二版へのキングの序文（一九五九年）⁽³⁸⁾

偉大なクエーカーの指導者ルーファス・ジョーンズが『非暴力の力』の初版の序論を書いたとき、彼は「ここに、あることとあるべきことがすばらしく調和した……新しい種類の書物がある……この書物には理想主義と同じく多くの現実主義がある」ことを見た。

それは一九三五年のことであった。その時以来、歴史上最も破壊的な戦争が地球を飲み込み、また恐ろしい次元の新しい武器は、戦争と文明は人類の将来へと共に存続することはできないことを、以前よりもより明白にした。暴力なしで対立を解決する新しい道が見えられ、実施されなければならない。

一九三五年以来の年月は、戦争が勃発すると戦争がいかに制御不可能なものを示したのみならず、リチャード・グレッグが初めてこの将来を見通す研究を準備したときいかに正しかったかを示している。この新版で詳論されているデンマークやノルウェーでのナチに対する、予期せぬとはいえ英雄的な非暴力的抵抗や、またフランス、オランダ、またドイツ国内での小さなグループによる抵抗は、そのような例証であった。また南アフリカでの不正な法に対する闘い、新国家ガーナによる自由の勝利、またモンゴメリーでの私たち自身の経験もそうである。

リチャード・グレッグが、生命に満ちた新たな活動の探求のために、インドでさらに一八か月過ごしたあと、彼の古典的書物の新版に時間と労力を注ぎ込んだことは喜ばしいことである。本書が、特に本国において、また世界中で、十分な社会的、個人的かつ政治的な自由に、人間の尊厳と一致した仕方での到達する道を

探究する人たちの間で、広範な読者層を獲得することを望む。

キングは、クエーカー教徒のルーファス・ジョーンズ⁽³⁹⁾の言葉を引用し、グレッグの書物の特色を「あることとあるべきこと」、「現実主義」と「理想主義」とが調和した書物だと紹介している。それは、この書物の持つ本質を的確に語る言葉であると同時に、キングが非暴力に見た優れた特質であると言えよう。われわれは、そこに、キングはがこの書物から学び取った最大の点を見ることができようと思う。すなわち、キングは、何よりもこの調和を学んだのである。「あることとあるべきこと」、「現実主義」と「理想主義」の調和こそ非暴力の本質であり、それこそが、自分たちの闘争に最もふさわしいものであることを確信したのである。⁽⁴⁰⁾ そう言っても過言ではないであろう。そして、その確信は、キングがモンゴメリーのバス・ボイコット闘争を継続していく上でその深い精神的支えとなり、またその後の公民権運動を通して、また反戦運動を通して、キングを支え続けた確信であつたと言えよう。また、だからこそ、キングは最後まで、さまざまな厳しい批判を受けながらも、非暴力を訴え続けることができたと言えるのではなからうか。

むすび

キングは、クローザー神学校時代、ちょうどインドから帰ったばかりのハワード大学学長のモデルカイ・ジョーンズの説教を通してガンジーの存在を知り、その非暴力の思想に目を開かれることになったが、⁽⁴¹⁾ その思想は、時を経て、以上で見たように、白人のクエーカー教徒で平和主義者のグレッグの書物と交流を通して大いに深められることになった。もちろん、それ以外にも、自らの学びや実践を通して、また同じ黒人同胞のラスティンやスマイリーたちとの出会

いと支援を通して、思想的にも実践的にも深められていったが、その中で、グレッグとの出会いを決して小さいものはなかったと言える。われわれはそこに、小さいながらも、非暴力思想の一つの系譜を見ることができであろう。

注

(1) キングは、最初の書物『自由への大いなる歩み——非暴力で闘った黒人たち』(雪山慶正訳、岩波書店、一九五九年)(Martin Luther King, Jr., *Stride Toward Freedom* (New York: Harper, 1958))の中で「非暴力への遍歴」(Pilgrimage to Nonviolence)との題で一項目を設け非暴力に至る自身の思想的遍歴を述べているが、その中でガンジーとの出会いとその影響について書いている。また説教集『汝の敵を愛せよ』(蓮見博昭訳、新教出版社、一九七四年(改訂版))(Martin Luther King, Jr., *Strength to Love* (Harper & Row, 1963))でも、少し内容が異なるところもあるが、同様の論述をしている。また、キングとガンジーの関係は、以下のアンズブローの著書初め、多くの書物で扱われている。John J. Ansbro, *Martin Luther King, Jr.: Nonviolence Strategies and Tactics for Social Change* (Lanham, New York, Oxford: Madison Books, 2000)。

(2) キングは、やはり上述の書物『自由への大いなる歩み』の中の同じ項目のところでニーバーについて論じている。ただしそれはかなり批判的でもある。

(3) 最近出されたラスティンの研究書としては、たとえば以下のようなものがある。

Daniel Levine, *Bayard Rustin and the Civil Rights Movement* (New Brunswick, New Jersey, and London: Rutgers University Press, 2000).

John D'Emilio, *Last Prophet: The Life and Times of Bayard Rustin* (Chicago: The University of Chicago Press, 2003). (以下、LPと略記)

Jerald Podair, *Bayard Rustin: American Dreamer* (Lanham, Boulder, New York, Tronto, Plymouth, UK: Rowman & Littlefield Publishers, Inc., 2009).

- (4) 以下の拙論を参照。「M・L・キングと非暴力——歴史における救済の原理をめぐる」、東京神学大学神学会編『神学』74号、教文館、二〇一二年。

- (5) 上掲注4の拙論参照。

- (6) Ira Chernus, *American Nonviolence: The History of an Idea* (Maryknoll, NY: Orbis Books, 2004). (以下、ANと略記)

- (7) Richard B. Gregg, *The Power of Non-Violence*, 1935. (以下、PNと略記)

- (8) *Ibid.*, 24.

- (9) AN, 89. ただし、チャーナスは、非暴力の考えはあくまでもキリスト教信仰に基づくものと考えている。また、その視点から、「彼」[グレック]は、ガンジーの非暴力の宗教的土台についてはほとんど語っていない」と指摘している。(AN, 89)

- (10) R. B. Gregg, PN, 24.

- (11) ドリエージュ自身は、この主張をF・ヴァイヤン『非暴力——根本道徳試論』(F. Vaillant, *La Non-violence: essai de morale fondamentale* (Paris: Cerf, 1990)) に依っている(ロベール・ドリエージュ、今枝由郎訳『ガンジーの実像』白水社、二〇〇二年)。

- (12) 以上、ドリエージュ『ガンジーの実像』一一九—一二〇頁。

- (13) この点については、前掲書、拙論「M・L・キングと非暴力——歴史における救済の原理をめぐる」を参照。

- (14) 以上、LP, 52による。

- (15) 出版年に関しては一九三四年とするものと一九三五年とするものがある。手元にある複製版には出版年が記されていない。本論では『キング資料集』に従って一九三五年として扱う。なお、本書との関連で、翌年 *The Value of Voluntary Simplicity* を出版している。

- (16) なお、デミリオは、グレックの書物の影響については、「グレックの書物は、ラスティンと他の若い宗教的精神を持った平和主義者たちの必須の入門書となった」と短く述べるに留まっている(LP, 52)。

- (17) Clayborne Carson, Tenisha Armstrong, Susan Carson, Erin Cook, and Susan Englander, with the assistance of the King

Research and Education Institute, edition, *Martin Luther King, Jr., Encyclopedia* (Westport, CT / London: Greenwood Press, 2008). (以下「MLKJE」と略記)

(18) <http://www.richardgregg.org/> (二〇一七年八月二五日アクセス)

(19) Martin Luther King, Jr., *The Papers of Martin Luther King, Jr.*,

(20) この点に関しては、以下のHPを参考にした。〈<http://www.quakersintheworld.org/>〉(二〇一七年九月六日アクセス)。これは、アメリカのクエーカー協会 (Quakers in the World) が開いているHPで、そこにはグレッグの簡単な略歴と、その著『非暴力の力』の紹介が記載されている。それによると、グレッグの父は、元々は大衆派の牧師であったが、のちクエーカー派に改宗した。グレッグ自身も「クエーカー教徒の弁護士」として紹介されている。

(21) MLKJE, 121.

(22) 上掲のクエーカー協会のHPによる。

(23) この点は「MLKJE, 122.」による。

(24) Ibid.

(25) Clayborne Carson et al. (eds.), *The Papers of Martin Luther King, Jr., Vol. 3: Birth of a New Age, December 1955–December 1956* (Berkeley and Los Angeles: University of California Press, 1997), 211. (以下「PMLKJ」と略記)

(26) Ibid.

(27) この時の展開については前掲の拙論を参照。東京神学大学神学会編『神学』74号、一六三―一六四頁。なお、このところで、ラステインをNAAACPから派遣されたと記したが、それはFORの誤りである。ここで訂正しておきたい。

(28) PMLKJ, vol. 3, 244–245

(29) Ibid., 211–212.

(30) Ibid., 245.

(31) Ibid., 267–269.

(32) M・L・キング著、クレイボーン・カーソン、クリス・シェバード編、梶原寿訳『私には夢がある——M・L・キング説教・講演集』(新教出版社、二〇〇三年)、一六三頁。

- (33) Martin Luther King, Jr., *Stride toward Freedom*, 1958. (雪山慶正訳『自由への大いなる歩み』岩波書店、一九五九年)
- (34) 以上『PMLKI, vol. 4 (2000), 547-548の編集者注より。』
- (35) 以上『ibid. 548.』
- (36) Ibid. 548-549の編集者注より。なお、すでに触れたように、後日グレッグはキングに直接会った時にも、会うべき人たちの一覧を渡した。
- (37) Ibid. 548.
- (38) PMLKI, vol. 5, 99.
- (39) Ibid. 編集者注によると、ルーファス・M・ジョーンズ(Rufus M. Jones)は、一九一七年のアメリカ・フレンズ奉仕団(American Friends Service Committee, AFSC)の共働創設者で、一九四八年の死まで、クエーカーの組織の名誉議長として奉仕した。
- (40) なおグレッグは、この非暴力の本質を「jūjitsu (柔術)」と紹介している。当時アメリカでは、すでに「柔術」という言葉がある程度定着していたようで、グレッグは何の断りもなしにこの言葉を用いて非暴力について説明している。これは、日本人にとっては特に興味深い指摘であり、これについては機会があつたら改めて紹介したいと思う。
- (41) 前掲書『自由への大いなる歩み』、一一四頁。